



彼らは、初めから友人などではなかったのです。佐倉清四郎は容姿端麗で学業成績も非常に良く、級友からの人気は絶大でした。それに比べて幸田米助は、所謂「劣等生」というもので、人の輪に溶け込めず、自分ひとりの世界にこもりがちで、どちらかと言えば煙たがられる人物なのでした。せめて外見だけでも良ければ「なんだか騒があるけれどそれも彼の魅力のひとつだよ」などと言われたのかもしれませんが。しかし、背中は老人のように曲がり、痩せこけていて、服の着方はだらしないし、マントや、制帽の白線はいつも薄汚れていました。笑顔でさえも得体の知れない薄気味悪さが漂う幸田でしたから、生憎、彼は、煙たがられるか、相手にされないかのどちらかの人物でしかありませんでした。

しかし、そのようなまるっきり正反対な二人が、いつも行動を共にしていたのです。それは、傍から見れば、孤独な幸田に対する佐倉の思いやりのように思われましたが、実は佐倉は、自分よりも劣っている幸田といることで得られる優越感を愉しんでいただけなのです。

「幸田、今度の試験の成績はどうだったんだい？」

これは、学校で試験があったとき、佐倉が幸田に対して必ずする質問でした。幸田は「あんまり良くはないんだ」などとボソボソ言いながら、成績表を佐倉に差し出します。学年首席の自分よりも幸田の成績が良いはずはありませんから、佐倉はとても良い気分です。

ただし、そんな佐倉も、一つだけ幸田に勝てないものがありました。それは化学です。何をやってもだめな幸田でしたが、何故か化学だけはいつも満点だったので。佐倉はそれが気に入りませんでした。神様が幸田に授けた唯一の長所だと思って我慢することにしました。

やがて、佐倉に恋人ができました。神山サヨと言って、佐倉の幼馴染で、彼女を知る人はみんな彼女のことを好きなのではないかというくらい、素晴らしい女性でした。お父さん、お母さんの仕事の手伝いをよくしますし、弟、妹たちの面倒もみます。手先が器用で、佐倉の下駄の鼻緒が切れたときも、あっと言う間に直してしまいました。

サヨはなんでもできましたが、特に弟たちと散歩をしながら歌う童謡は、それはそれは素晴らしいものでした。佐倉はサヨの歌声に惚れ込んでいたので、ある日、サヨからもじもじと好意を打ち明けられると、すぐにそれを受け入れたのでした。

その後佐倉は大学へ進学し、卒業すると同時に、サヨと結婚しました。結婚式には、幸田も呼ぼうと思いました。自分の幸せな姿を見せびらかしたかったし、この数年間で（高等学校を卒業して以来、ふたりは一度も会っていませんでした）、幸田がどれだけみすぼらしくなったのか、または少しはましになったのかを見てみたいという気持ちもあったのです。

しかし、友人など、ひとりもいなかった幸田です。彼の所在は、旧友の誰に尋ねても不明であったので、結局、招待状は出せませんでした。

佐倉は、かねてから憧れていた新聞社に就職し、記者として働くようになりました。サヨとの間には長女・あやめも生まれ、この家族は幸せの絶頂期を迎えていました。

ところがそんなある日、サヨが突然失踪したのです。佐倉は愕然としました。あやめの姿もありませんでした。サヨの行き先に、心当たりは全くありません。サヨの荷物を調べてみても、旅行用の鞆や洋服、金などが持ち出されている様子はなく、家の中が荒らされた形跡もありません。

事故に巻き込まれたのか、誘拐されたのか、どちらにしても何らかの情報は入ってきそうなものですが、ふたりの足取りは全くわからないまま、一ヶ月が過ぎました。身代金の要求などが全くないことから、サヨ本人の意志による失踪なのではないかと思われました。

悲しみに暮れる佐倉は、仕事が全く手につきません。

「君、つらいのはわかるがね。仕事なんだよ。以前はメ切は必ず守られていたし、内容もとても評判だった。なのに、何なんだ今の君は。毎日毎日印刷所からせつつかれるまでになるし、そのへんの学生に書かせた方がよっぽどうまいんじゃないかと思えるようなものしか書けてないじゃないか」

編集長からこのようなことを言われるなんて、以前では想像もできないことでした。佐倉は編集長の大的お気に入りだったのです。記事が書けなくなった途端のこの手のひら返しに、佐倉は怒りをおぼえましたが、周りにどれほどの迷惑をかけているかも、佐倉にはよくわかっていたので、

「申し訳ありません」

と素直に、深々と頭を下げて謝り、しばらくの間休ませていただけませんかと申し出ました。

「どうぞごゆっくり。大丈夫、君がいない間は別の人間を雇うことにするから」

自宅に戻ると、郵便受けがいっぱいになっていることに気付き、蓋を開けると、下の方で押し潰されていた新聞や郵便物がどさどさと足もとに落ちてきました。ほとんどは新聞でしたが、手紙も何通か届いているようです。

そうだ、もしかしたら、サヨがどこかから手紙をよこしているかもしれない。そう思った佐倉は、封書をすべて確認しましたが、サヨからのものはありませんでした。ほとんどは仕事関係のもので、個人的なものではサヨ宛てにサヨの友人から届いたものが二通、そして、佐倉宛に一通、差出人の欄に見覚えのない名前が記されている手紙が届いていました。

「綿貫カケル……？」

切手や消印がないため、直接この郵便受けに届けられたもののようです。不気味に思いましたが、とりあえず封を開けてみたところ、中には『綿貫一座』とうサーカス団のチラシと、無料招待券が入っていました。

「なんだ、サーカスの宣伝か……」

床にポイと投げ捨てる、綿ぼこりが、ふわりと転がっていきました。家の中は、ほこりや脱ぎっぱなしの衣服等で、すっかり散らかってしまっていました。サヨがいなくなってから、家は、生活をする場所ではなく、ただ寝るだけの場所となってしまいました。

「俺は、これからどうすれば」

明日からは、仕事に行くこともないのです。どうすればいいのか、本当にわかりませんでした。

「なにもかも、うまくいっていたのに」

気晴らしといっても、趣味らしい趣味はなく、困っていることを素直に打ち明けられる友人も

いません。親のところに身を寄せようかとも思いましたが、佐倉の自尊心がそれを拒みました。

俺は、記者という仕事に誇りを持っている。このままではいけない。編集長をあっと言わせることのできるような記事を書いて、記者としてもう一度がんばらなくては。こんなことでは、サヨが戻ってきたときに、合わせる顔がないじゃないか——

招待券を握りしめ、佐倉は家を飛び出しました。

ビッグトップと呼ばれる移動テントの中は、六月ということもあり、非常に蒸し暑く感じられます。たまに風が入るとテント全体がゆっくりと揺れて、ギイイイ……と、低く長く軋みました。開演まであと三十分以上もあるというのに、客席はほぼ満席の状態です。天井からぶら下がっているはだか電球の頼りない光が、汗ばんだ観客の顔を、ひとつひとつ、舐めるように、テントの揺れに合わせて行ったり来たりしています。その光景はなんとも不気味で、これから始まるのはサーカスではなく、なにか別の秘密の儀式だと言われた方がぴったりだと思えるほどでした。

数年前に外国のサーカス団が来日してからというもの、日本ではサーカスが黄金時代を迎え、いくつもの団体が各地で活動していました。その中でもこの綿貫一座の人気は群を抜いていて、そういった娯楽に全く興味のない佐倉でも、その名前を知っているほどです。というのも、綿貫一座に取材を申し込んだところ門前払いを食らったと、後輩がぼやいているのを偶然聞いていたからでした。

そうだ、サヨは、サーカスが観たいと言っていた。サヨが、あやめが戻ってきたら、三人でまたここに来よう。それまでに俺は、今まで誰の取材も拒んできた綿貫のインタビュー記事でも書いて編集長の鼻を明かし、また記者としてあの編集部で——という佐倉の決意を打ち消すかのように、ラッパやシンバルなどの楽器の音が場内に響き渡り、テントの中は、眩しすぎるくらいの照明に照らされました。いよいよ開演です。

まずは出演者全員の大パレードです。ある者は象に乗り、またある者は玉に乗るなどして、観客に向かってしきりに手を振っています。直径十三メートルの円形の馬場を全員が一周し終わると、赤や黄色の美しい衣装を身に纏った踊り子のダンスが始まりました。踊り子は、妖精かなにかのように軽やかに踊ります。客席からは自然と手拍子が起こり、佐倉もすっかり見入ってしまいました。

踊り子たちがふたりずつ向かい合って、奥の出入り口から馬場の真ん中までの間に等間隔に並んでアーチを作ると、音楽がぴたりと止まりました。続いてドラムロールが流れ、シンバルが、ジャン、と鳴ると、その出入り口から、赤に白の水玉が入ったけばけばしい道化服を着た男が出てきて、馬場の真ん中でうやうやしく頭を下げました。

「みなさん、ようこそお越しくださいました。私は綿貫一座座長、綿貫カケルと申します。今夜は、どうか存分にお楽しみください！」

神様は俺に味方をしていると、佐倉は思いました。この気持ちの悪い囁れ声は、幸田のものに違いありません。綿貫座長は、幸田だったのです！

サーカスはそれから馬上曲芸、動物芸や棒剣技などが上演され、約一時間後、再び綿貫座長が馬場に現れました。「これから約三十分の間、休憩となります。その間、みなさんが退屈されませんように、小綿貫一座がみなさまのお相手をいたします」

そう言って座長が引込むと、入れ違いにヴァイオリンと鳥籠を持った別の道化師が現れ、それに続き、踊り子たちが二人、それぞれの手に何かを抱えて現れました。道化師が真ん中に、その左右の斜め後ろに踊り子がひとりずつ立ち、三人揃って礼をしました。

「みなさん、こんばんは。小綿貫一座、座長のセディでございます。時間が限られていますので、私の話はやめにして、みなさまにはさっそく、小さな歌姫・テレサの歌声をお楽しみいただきたいと思います」

セディと名乗った道化師は、他の踊り子が用意したテーブルに鳥籠を優しく置くと、ヴァイオリンを弾き始めました。すると、どこからともなく、美しい歌声が聞こえてくるではありませんか！ 歌手らしき人物は見当たらず、踊り子たちの口が動いている様子もありません。やがて前の方の席の客のひとりが、

「アッ、ごらんよ。歌い手は、あの鳥籠の中にいるよ」

と叫ぶと、場内の観客すべての視線が、一斉に、鳥籠に向けられました。佐倉も見ましたが、遠すぎてその姿を確認することはできません。

どよめきが起こりましたが、それも一瞬のことで、テントの中はすぐに静まり返りました。全員が、テレサの歌声に聞き惚れてしまったのです。外国の言葉の歌を一曲歌い終わると、拍手や口笛で、場内はまた騒がしくなりました。

「ありがとうございます、ありがとうございます。ではでは、歌姫のお次は猛獣に登場してもらいましょう。と言っても、もうここにやってきているのですよ、みなさん。ごらんください！」

その声に合わせて、ふたりの踊り子は背を向け合い、馬場の外側まで歩くと、自分から一番近い観客へと、抱えていたものを手渡しました。

「うわあッ！」

二ヶ所で、ほぼ同時に叫び声が起こりました。その様子を満足そうに見つめながら、道化師が頷いています。

「みなさん、その子たちは、小綿貫一座のかわいい猛獣、虎のトニイと象のジョニイです！ 私たちと一緒にいます。生きています。どうぞ、大切に、みなさんで仲良く撫でてあげてください。引っ張ったり、乱暴にすると、噛みつかれますからね、お気を付けくださいね」

フン、馬鹿馬鹿しい。子ども騙しもいいとこだ。さっきの歌姫だって、籠の中には機械仕掛けの人形を入れておいて、歌っていたのは舞台の裏にいる踊り子のうちの誰かひとりってとこだらう。この動物たちだって、きつとなにかの仕掛けが——と考えていると、佐倉のところに、まず虎のトニイが回されてきました。生まれたての子猫よりもまだ小さく、体長は佐倉の中指の長さほどしかありません。受け取ると、体温がありました。お腹の辺りに触れると、鼓動も感じました。仕掛けを探そうとすると軽く引っ掻かれ、ひるんだ隙に、隣の薄汚い子どもから奪われてしまいました。

休憩時間は、半ば混乱しながら、あっという間に終わりました。その後も一時間ほど、素晴らしい芸が次々と上演されましたが、佐倉の目には留まりませんでした。ただただ、さっきの休憩時間のことばかり思い返していたのです。頭の中で、記事がどんどん練られていきます。久しぶりの感覚でした。心臓が早鐘のように鳴り、喉はカラカラです。武者震いでしょうか、指先は、小さく震えているように感じます。

道化師の退屈な軽業も終わり、サーカスはやっとならフィナーレを迎えました。家路を急ぐ観客の

流れにひとり逆らい、佐倉は楽屋テントを目指しました。

テントの入り口には、幸田の弟子らしき少年が立っていました。

「すいません、ここから先はお通しできませんので」

少年は、困った顔で言いました。

「俺は、こう……いや、綿貫座長の学生時代の親友だ。彼と話をしたくてね」

「座長からは、誰も中に入れないように言われているんです」

「俺の言っていることは本当なんだよ。ねえ君、佐倉って言えば、座長はきっとわかってくれるさ」

「お願いします、帰ってください！」

「俺が嘘をついているとでも思うのかい？」

「団員以外人間は、誰であろうと、テントに近づけるなと座長から言われています」

この調子で押し問答が続き、これはもうだめかもしれないと諦めかけたそのとき、

「騒々しいぞ！ 何の騒ぎだ」

と怒鳴る、先ほどの囁れ声が、テントの奥から聞こえました。その声に少年は縮み上がり、上ずった声で、

「座長の親友という人が、座長とお話をしたいとおっしゃっています。佐倉さんという人です」

と、奥に向かって言いました。

「佐倉だと？」

かかとをズルッ、ズルッと引きずって歩く足音が聞こえたかと思うと、少年の背後に、幸田の半身が見えました。佐倉はうれしいようなゾッとするような、不思議な気持ちになりました。白塗りの顔に道化服を着ていても、やはり幸田は幸田です。痩せこけているところは相変わらずで、公演中はまっすぐになっていた背中も、今はやはり昔と同じように曲がっていて、そこにいるのは、綿貫カケルの格好をした幸田でしかありませんでした。

佐倉の姿を見ても表情ひとつ変えない幸田に、佐倉はすかさず声をかけます。

「久しぶりだな、幸田！」

幸田はその一言に、いかにも忌々しいといった表情を浮かべ、

「……まあ、入りたまえ」

とだけ返して、テントの奥へと歩いていきました。幸田の方を向いて目をひん剥いたまま突っ立っている少年を押し退け、佐倉がそれに続きました。

「それにしても、すばらしいサーカスだったよ」

「そうか、それはよかった。すまないが、こんなところしか話せる場所がないんだ」

幸田は振り向きもせず歩き、鏡が五枚ほど並んだ楽屋テントにたどり着くと、木の椅子に座り、佐倉にも座るよう促しました。

それから二人はしばしの間、懐かしい学生時代の話をしました。厳しかった先生の話や合宿のときの話など、話題は尽きません。

そのうちに幸田が、

「君は、神山さんがその後どうなったか知っているかね？」

と、ポツリと言いました。

「どうしてそんなことを訊く？」

「いやね、君と話しているうちに、昔のことをいろいろと思い出してね。彼女は非常に有能な女性だった。針仕事も炊事も得意で、こんな僕にも優しくしてくれたし、何より歌が素晴らしかった。神山さんなら、きちんと音楽の学校に通っていたら、きっと素晴らしいソプラノ歌手になっていたと思うのだが。是非とも、うちのサーカスで雇いたいものだよ」

佐倉は、しめた、と思い、本題に入ることにしました。

「サヨでなくとも、君のところには立派な歌姫がいるじゃないか。休憩のときに出てきた……テレサといったね。あれは一体、どんな仕掛けになっているのだい。歌姫だけじゃなく、虎と象も、まるで生きているかのようだったよ」

幸田はニヤリと笑いました。昔と何ら変わらない、あの陰気臭い笑みでした。ただ、僅かに昔と違うところといえば、その鼻の脇から顎の方へ向けて、薄気味悪い皺が数本、深く刻まれているということぐらいでしょうか。

「それは言えないな。あの仕掛けはね、この一座の中でも、僕以外に誰も知らない秘密なのだよ」

「頼む、幸田。俺は、どうしても、人目をひく記事を書かなければならない」

幸田に何かを頼むなどということは、学生の時分では考えられないことで、佐倉はこの上ない屈辱を感じましたが、今はそんなことに構ってはいただけませんでした。

「おお、君は記者をしているのか」

幸田は目を見開き、しばらくの間黙り、佐倉の顔を見つめました。

「そう、そうだよ。××新聞の記者をしている。さすがに知っているだろう。うちの新聞で取り上げれば、綿貫一座の名が、今よりずっとたくさんの人たちに知れるんだ。どうだい、悪い話ではないだろう」

そう言いながら、佐倉は、ついさっき萎んでしまったばかりの自尊心が、また膨らみ始めるのを感じていました。——そうだ、いくらサーカス団の長だとしても、知名度がなくては、得体の知れない集団を引き連れてのどさ回りで、やっと日銭を稼いでいるだけの人間でしかないのだ。

そんな意地の悪い佐倉の考えなど知る由もない幸田は、

「……そうだな、それなら、こちらも宣伝になって都合が良いかもしれないな。よし。君と僕の仲だ。特別に、歌姫の秘密を教えよう」

と、秘密を話すことを快諾し、テーブルの上の蝋燭を手にとると、猛獣の檻のあるテントへと入っていきました。佐倉もその後から、恐る恐る、入っていきました。

檻の中に入れられているライオンや虎などの猛獣たちは、佐倉の姿を見るなり、唸ったり、檻をガチャガチャ鳴らしたりしましたが、幸田が「シッ！」と一喝するやいなや、シンと静まりかえってしまいました。テントの中を照らすのは、幸田の持っている蠟燭ただ一本きりで、テントの隅の方は全くの暗闇です。ここはただのテントで、これから幸田とふたりで話をするだけだということに、そのことを考えると、佐倉はなんだか空恐ろしい気持ちになるのです。

「アア、あれかな、歌姫は」

ライオンの檻と象の檻の間に置かれたテーブルの上に、鳥籠があるのが辛うじて見えました。佐倉はライオンを気にしながら早歩きで近寄り、中を覗き込みます。暗いのははっきりとはわかりませんが、歌姫らしき小さな生きものは確かに中にいて、心地よさそうな寝息のようなものが聞こえます。

「へえ、この歌姫は眠ったりもするのかい。一体どうなっているのだ」

「まあ、待ちたまえ。その前に、昔のことをもう少しゆるりと話そうじゃないか」

「それはさっきも話したからいいだろう」

「いいから、聞きたまえ」

幸田は蠟燭を鳥籠の横に置き、足が腐りかけた木椅子をふたつ、テーブルを挟んで向かい合わせに置きました。蠟燭の炎に照らされると、歌姫の姿がよく見えました。小さな臉はしっかりと閉じられ、身体には毛布の切れ端がかけられています。

また、幸田の顔もよく見えました。白塗りの顔のせい、眼球がやけに赤く血走っているように見えます。顔面に無数に寄っている深い皺、鉤のように曲がった鼻、鋭く尖って突き出た顎……。唇は赤く塗られていて、人を喰らった後だと言われても違和感はないほど、薄気味悪く、醜悪な顔です。これほど蒸し暑いテントの中でも汗ひとつかいていないという点がまた、人間らしさという枠から、幸田を一步外に追いやっています。

思い出話など初めからどうでもよく、一刻も早く歌姫の話を知りたい佐倉でしたが、ここで幸田の機嫌を損ねてしまっただけでは台無しです。逸る心を抑えつけるように、額の汗を袖口で拭くと、幸田に倣い、ミシリと軋む椅子に腰掛けました。その様子を見届けてから、幸田がゆっくりと口を開きました。

「佐倉。学校なんざ、実につまらないところだと思わないかい」

「どうしてだ」

「僕はろくな成績をとっていなかったし、大学にも行かなかった。学力も愛想もない僕は、君や他の皆のように仕事に就くこともできず、見せ物小屋の切符もぎりなんかをやっていた頃もあったが、今ではサーカスの座長だ。その辺の大卒の会社員などよりか、よほど稼いでいるのだ」

これまで見下していた幸田から、今度は自分が見下されているように感じられるこの言葉は、佐倉の癪に障り、そうだな、という短い相槌でさえ打ち損ねそうになったほど、瞬時に苛立ちが募ったのでした。

「昔の僕は、勉強も、運動も、何もかも君には勝てなかったというのに。……そう、神山さんに関しても」

「何だと？」

「僕は、神山さんのことが好きだったのだ」

今度はその言葉に、佐倉の気分はガラリと良くなりました。結婚式に幸田を呼べなかったことが、今更ながら悔やまれてなりません。この男が、サヨに恋だと——声を上げて笑い出しそうになるのを堪えながら、

「そうだったのか。実はサヨはね、今では俺の妻なんだ。子どもも生まれてね」

と言い、幸田の驚いた顔を見逃すまいと、瞬きさえも堪え、目をカッと見開いていた佐倉でし

たが、思いの外、幸田に驚いた様子はなく、それどころか、うっすらと笑みを浮かべ、じっと佐倉を見つめ返しました。

「知っているよ。僕は、神山さんのことなら、何でも知っている」

神山さんは一ヶ月程前に、サーカスを観に来てくれた。卒業以来、そうだな、もう十年以上経つのか、一度も会っていなかったけれど、ずっと憧れていた人だからね、一目見てすぐに彼女だとわかったよ。急遽、演目をひとつ増やして、神山さんを指名して手伝ってもらうことにしたんだ。ほら、箱の中に美女を閉じこめて、剣を刺していくあれさ。急なことだったけれど、誰も反対はしなかった。だって、座長は僕なのだからね。

公演後に、お礼があるからと言って、弟子にここまで神山さんを連れてこさせた。何、少し話をしたかっただけなんだ。さすがに彼女は僕のことなんか覚えてくれていなかったけれど、佐倉といつも一緒にいた幸田だと言うと、すぐにわかってくれた。

それから、お互いの近況を語り合っただけね。君と結婚したということも、そのときに聞いた。ところがだよ、君のことを話している神山さんは、ちっとも楽しそうに見えない。何かあったのかと訊くと、泣き出してしまった。幸田君はすごいね、私なんかとは大違いなどと言うから、何がだと言ってみたら、彼女には夢があったんだね。歌手になるという夢さ。

君にも当然わかっているだろう、彼女は歌うことが何より好きだということと、その歌声がとても美しいということくらいは。そして彼女の夢だって。いつか、君にその夢を……夢って言ったって、何も歌手として有名になりたいとかいう大それたものじゃない。酒場で歌を歌いたいということと話したら、君は、仕事はしないで家にいてほしい、僕の稼ぎだけじゃ足りないのか？ などと言ったそうだね。そんなみっともないことは止せよとも。

僕は君に対して、激しい憎悪を感じたよ。彼女の才能に目を向けようとしめない君のことが、憎くて憎くて仕方がなかった。彼女は小さい頃からずっと、学校にも行かず、家族のために沢山働いてきたんだ。彼女のことだから、君と結婚した後は、妻として、母として、やはり一生懸命尽くしていたのだろうね。そんな神山さんの夢を、君は頭ごなしに否定したんだ。

彼女はとても悩んでいた。歌を歌う仕事がしたい、だけど今は子どもがいるし、この子が大きくなってからだって、主人が許してくれるはずがない。このまま歳をとれば後悔し続けることはわかっているのに、私にはどうすることもできないとね。

君さえいなければ、彼女は夢を叶えることができるのかもしれない。僕は神山さんのことを思うあまり、君を殺す計画を立てたよ。

君を殺すには、どのような方法が一番良いだろう。気位の高い君だからね、僕は君の自尊心が木っ端微塵になるような方法を考えた。いろいろなことを考えたけれど、まあそれは省くとして、結論としては、君のその大きな自尊心を、身体ごと小さくしてやろうということになった。

小さくしてしまえば、君の存在に気づく者はいなくなり、地をせっせと蟻のように這い回っているうちに、誰かに踏み潰されて死んでしまうだろうって寸法さ。信じられない話だろうが、実際、そのための薬も数日後には完成させていたのだ。化学だけは得意だからね。

なのに、僕はその薬を使うことを躊躇った。何故だかわかるかい。僕は、君に苦痛を与えたかったのだ。踏み潰されるというのも十分に苦痛であるし屈辱的でもあろうが、死んでしまえば、そこで全てお終いだからね。

君にとっての一番の苦痛は何だろう。必死で考えたよ。けれど、何でもできて、何でも手に入れてきた、そんな君の気持ちなど、僕にわかるのだろうか。君と僕の間には、この世に生まれ落ちたその瞬間から、天と地程の差が、すでに、確かに、あったというのに。

そう思うと、考えても無駄だと思った。君を苦しめるためとはいえ、君のことをあれこれと考えている自分に腹も立った。それで、手っ取り早く、神山さんを君から奪うことに決めた。神山さんを蔑ろにした罰としてね。しかし、どうやって奪うのか。口説き落とすなんてことは……フッフ、僕なんかでは到底無理だと、考えるまでもなくわかっていた。誘拐するわけにも、殺すわけにもいかない。歌手としてうちで雇おうにも、君はきっと反対するだろうし、それを彼女が押し切るとは考えられない。

そのときに、思ったのだ。薬は神山さんに使おう。そして永遠に、僕の傍に居てもらえたら、どんなに素敵だろうと。

神山さんには申し訳なかったが、僕は、神山さんのことを諦めきれなかったのだ。

佐倉は、もう一度鳥籠の中を覗きました。四寸のサヨが、気持ちよさそうに眠っています。佐倉は、気が狂いそうになって、鳥籠を激しく揺さぶって叫びました。

「サヨ！ お前は見世物などではないのだぞ！」

「おい、彼女に乱暴するな！」

幸田は立ち上がり、佐倉から鳥籠を奪い取り、自分の座っていた椅子の上に置きました。

「……」

サヨは迷惑そうに目を覚まし、佐倉の顔をしばらく見つめてから、さきほどのサーカスの中で歌っていた歌をもう一度歌い出しました。

「サヨ？」

「神山さん……いや、テレサは、僕にしか関心を示さない。彼女はもはや、僕だけのものなのだ。君の妻であった神山サヨは、もうこの世には存在しないのだよ。そもそも、彼女の歌を聴いた時点で神山さんと気付くことのできなかつた君に、彼女の夫だと名乗る資格などあるのかい。僕は甚だ疑問に感じるよ」

何も言い返せずにいる佐倉に向かって、幸田は、勝ち誇ったように高笑いをしました。同時に、今まで静かだった猛獣たちが雄叫びを上げ始め、それにテレサの歌声が混じり合い、小さなテントは大音響で今にも張り裂けてしまいそうです。美しいはずの歌声でさえ、何かおそろしいもののように聞こえます。

「ハハハハハ！ まさか、こんな日が来るとはね。夢にも思っていなかったよ。アア、愉快、とても愉快だ。どうだい、佐倉。うちのサーカスで働くというのは？ ちはね、実力主義なんだ。これまでの実績や経験なんざどうだっていい。誰でも、最初は猛獣の世話や小道具の準備からでね、そうだね、芸の練習を始められるのは、早くて半年後からかな。否、しかし優秀な君のことだ。もっと早く舞台上に上がることができるのかもしれない。もしかすると、半年よりもっと早く、そうだね、小綿貫一座の座長くらいにはなっていたりしてね！ ハハハハハ……」

腹を抱え、肩を大きく揺らして笑う幸田は、可笑しくてたまらないといった様子で、涙まで流して笑いながら床に崩れ、それでも笑いはおさまらず、呆然としている佐倉の足もとで、薄気味悪い水玉模様の塊となり、狂ったように転げまわりました。幸田の笑い声も、猛獣の鳴き声も、テレサの歌声も、大きくなっていくばかりです。

割れてしまいそうな頭を抱え、佐倉はテントを飛び出しました。そして走り去りました。途中、何度も足が纏れ、のどはカラカラで、息をうまく吸い込むこともできず、どうにかなってしまいそうでしたが、地獄のようなどよめきが、どこまでも、どこまでも追いかけてくるようで、ちょっとでも休もうものなら首根っこを掴まれ、あのどよめきに飲み込まれてしまうように思われ、足を休めることができませんでした。

命からがら家にたどり着いた佐倉は、玄関の鍵を閉め、靴も脱がずに押し入れの中に飛び込むと、布団にくるまり、翌日の昼過ぎまでガタガタと震えていました。

押し入れの襖をソロリと開き、まるで泥棒のように警戒しながら出てきた佐倉は、しばらくの間、畳の上に座り込んで呆然としていましたが、外から赤ん坊の——あやめの泣き声が聞こえ、ハッと我に返りました。玄関を開けると、そこには、毛布に包まれたあやめが泣いていて、あやめの下には、「ひとりでハ寂しいだろう」と、新聞やビラの文字を一文字ずつ切り抜いて貼り付けられた紙が置かれていました。

佐倉の腹の底から、怒りと、幸田ごときに情けをかけられた悔しさがこみ上げてきました。——幸田の、綿貫の悪事を世間に知らしめてやらなくては。自宅の書斎に飛び込んだ佐倉が、昨夜見聞きした出来事を一つ残らず書き上げてしまう頃には、もう外は真っ暗になっていましたが、佐倉は構わず、編集長の自宅へと押しかけました。

「……フム」

最初に演目の内容とそれに対する感想、続いて誘拐と薬の件、最後に幸田と佐倉の関係について殴り書きされた分厚い原稿を読み終え、編集長は、困ったような表情で原稿と佐倉の顔を二、三度見比べてから、佐倉に優しく語りかけました。

「実を言うとね、少し言い過ぎたかと心配していたんだ」

「そんなことはいいんです、編集長！ 明日は間に合わなくても、明後日の新聞にはきっと載せていただけますね？」

「佐倉、いいかい。君の家族がこのような状態であるから、君に直接言うしかないのだがね、気を悪くしないで聞いてくれたまえ」

「はい」

「君、一度、脳病院で診てもらってはどうか？」

「……のう……」

佐倉には、編集長の言っていることの意味が解りませんでした。

「人間を小さくする薬なんて、そんな馬鹿げたものが存在するものか。しかもその動機が、君への復讐？ こんな突飛な話を信じろなんて、無理を言うにも程がある」

「わかります。しかしこれは全て本当のことなのです！ お願いします、どうか載せてください！」

「綿貫一座の人気は凄まじい。今まで取材できた者はいないのだから、君のこの原稿は貴重だ。しかしだよ。『綿貫座長は人さらい』などという見出しを、証拠も無しに載せられる道理があるか！」

佐倉は肩を震わせ、目に涙を浮かべました。本当のことを言っているのに信じてもらえないことが、悔しくて悔しくてなりません。

「編集長……」

二人は応接間で向かい合わせで座っていましたが、佐倉はヨロヨロと立ち上がり、編集長の真横まで歩くと、その場で土下座をしました。

「この通りです。その原稿の中には、嘘などひとつもありません。編集長、どうか、どうかお願いします！」

「佐倉。顔を上げてくれ。いくら頼まれても、これは載せられない」

「そんな……。お願いします……。お願いします、お願いします」

謔言のようにぶつぶつと繰り返し、佐倉は顔を上げました。その顔は、涙と鼻汁でぐちゃぐちゃになっていて、さらに、真っ赤に充血した目や、ぶるぶると震える唇にゾツとして、編集長の身体が硬直したのと同時に、佐倉は編集長の肩を恐ろしい力で掴み、揺さぶりました。

「編集長！ お願いします！！ これを載せてください！！ うんと言ってくださるまで、私はここから動きません！！」

「き……君、やめたまえ！」

この騒ぎに、編集長の家の者がかけつけてきて、編集長の息子と女中の二人がかりで、やっと佐倉は編集長から引き剥がされました。息を切らしながら、編集長が言います。

「分かった。……ハア、こん、今週中には、載せることにする。だから、もう、帰ってくれたまえ」

「本当ですか！」

「ああ、約束するよ。この原稿は私が預かっておく。君は、もう少し休んで、本調子になってから戻ってくるといい」

「ありがとうございます、編集長！」

佐倉の原稿が文化面の記事として載ったのは、それから三日後の日曜日のことでした。見出しは、『日本のサーカスの顔 —綿貫一座 座長 綿貫カケル—』に変更され、文面は、薬、誘拐、佐倉との関係の部分が除かれている以外、佐倉が書いた通りの内容となっていて、左下隅の『記者の目』という十行足らずの小さな枠には、サーカスを観ての佐倉の感想——演目はどれも素晴らしく、休憩時間でさえも夢のような一時であったという旨の部分のみ——が載せられていました。記事を読み終えた後、佐倉の自尊心は、『記者の目』の枠よりもさらに小さく萎んでしまい、床に倒れ込み、やがてお腹を空かせて泣き始めたあやめの世話をすることさえ、しばらくの間できませんでした。

絶望した佐倉は、新聞社を辞め、小さな工場に再就職しました。決められたことを、一日中、黙々と続けるのはとても退屈なことでしたが、あやめとふたりで、それなりに幸せに暮らしていました。

しかし、あの夜の出来事は、毎晩のように夢に見ます。皺の深い肌と、耳まで裂けそうな大きな口、血走った眼球、そしてそれらに似合わない水玉の道化服を纏った幸田の姿と噎れた笑い声にうなされ、夜中に何度も目を覚ます日々は、ずっとずっと続いていくのでした。

十年後、各地で順調に興行を続けてきた綿貫一座を、災難が襲います。太平洋戦争の末期であったその頃、サーカスが禁止され、猛獣殺害の命令が出されたのです。

幸田は、ショックのあまり、服毒自殺をしました。綿貫一座は、小さな歌姫を目玉に絶大な人気を博していたため、この事件は新聞等で大きく報じられることとなりました。そして、日本中のサーカスを愛する人々が、幸田の、否、綿貫座長の死に心を痛め、涙を流しました。

戦後、綿貫一座は復興した他のサーカス団に吸収されていきましたが、小さな歌姫の所在だけは、誰も知りませんでした。

もしかすると、あれは全て幸田の作り話で、やはり歌姫には何か仕掛けがあったのかもしれませんが。しかし、唯一真相を知っている綿貫座長は死んでしまい、今ではそれを確かめる方法はありません。確かなのは、サヨは依然行方不明のままということだけです。